疑惑

芥川龍之介

今ではもう十年あまり以前になるが、ある年の春私（わたくし）は実践倫理学（じっせんりんりがく）の講義を依頼されて、その間（あいだ）かれこれ一週間ばかり、岐阜県（ぎふけん）下の大垣町（おおがきまち）へ滞在する事になった。元来地方有志なるものの難有（ありがた）迷惑な厚遇に辟易（へきえき）していた私は、私を請待（せいだい）してくれたある教育家の団体へ予（あらかじ）め断りの手紙を出して、送迎とか宴会とかあるいはまた名所の案内とか、そのほかいろいろ講演に附随する一切の無用な暇つぶしを拒絶したい旨希望して置いた。すると幸（さいわい）私の変人だと云う風評は夙（つと）にこの地方にも伝えられていたものと見えて、やがて私が向うへ行くと、その団体の会長たる大垣町長の斡旋（あっせん）

によって、万事がこの我儘な希望通り取計らわれたばかりでなく、宿も特に普通の旅館を避けて、町内の素封家（そほうか）N氏の別荘とかになっている閑静な住居（すまい）を周旋された。私がこれから話そうと思うのは、その滞在中（たいざいちゅう）その別荘で偶然私が耳にしたある悲惨な出来事の顚末（てんまつ）である。

その住居（すまい）のある所は、巨鹿城（ころくじょう）に近い廓町（くるわまち）の最も俗塵に遠い一区劃だった。殊に私の起臥（きが）していた書院造りの八畳は、日当りこそ悪い憾（うらみ）はあったが、障子襖（しょうじふすま）もほどよく寂びのついた、いかにも落着きのある座敷だった。私の世話を焼いてくれる別荘番の夫婦者は、

格別用のない限り、いつも勝手に下っていたから、このうす暗い八畳の間（ま）は大抵森閑として人気（ひとけ）がなかった。それは御影（みかげ）の手水鉢（ちょうずばち）の上に枝を延ばしている木蓮（もくれん）が、時々白い花を落すのでさえ、明（あきらか）に聞き取れるような静かさだった。毎日午前だけ講演に行った私は、午後と夜とをこの座敷で、はなはだ泰平に暮す事が出来た。が、同時にまた、参考書と着換えとを入れた鞄のほかに何一つない私自身を、春寒く思う事も度々あった。

　もっとも午後は時折来る訪問客に気が紛（まぎ）れて、さほど寂しいとは思わなかった。が、やがて竹の筒（つつ）を台にした古風なランプに火が燈（とも）ると、人間らしい気息（いぶき）の通

う世界は、たちまちそのかすかな光に照される私の周囲だけに縮まってしまった。しかも私にはその周囲さえ、決して頼もしい気は起させなかった。私の後（うしろ）にある床（とこ）の間（ま）には、花も活（い）けてない青銅の瓶（かめ）が一つ、威（い）かつくどっしりと据えてあった。そうしてその上には怪しげな楊柳観音（ようりゅうかんのん）の軸が、煤（すす）けた錦襴（きんらん）の表装（ひょうそう）の中に朦朧（もうろう）と墨色（ぼくしょく）を弁じていた。私は折々書見の眼をあげて、この古ぼけた仏画をふり返ると、必ず炷（た）きもしない線香がどこかで匂（にお）っているような心もちがした。それほど座敷の中には寺らしい閑寂の気が罩（こも）っていた。だから私はよく早寝をした。が、床にはいっても容易

に眠くはならなかった。雨戸の外では夜鳥（よどり）の声が、遠近（えんきん）を定めず私を驚かした。その声はこの住居（すまい）の上にある天主閣（てんしゅかく）を心に描かせた。昼見るといつも天主閣は、蓊鬱（おううつ）とした松の間に三層（さんぞう）の白壁（しらかべ）を畳みながら、その反（そ）り返った家根の空へ無数の鴉（からす）をばら撒（ま）いている。――私はいつかうとうとと浅い眠に沈みながら、それでもまだ腹の底には水のような春寒（はるさむ）が漂っているのを意識した。

するとある夜の事――それは予定の講演日数が将（まさ）に終ろうとしている頃であった。私はいつもの通りランプの前にあぐらをかいて、漫然と書見に耽（ふけ）っていると、

突然次の間との境の襖が無気味なほど静に明いた。その明いたのに気がついた時、無意識にあの別荘番を予期していた私は、折よく先刻書いて置いた端書の投函(とうかん)を頼もうと思って、何気なくその方を一瞥した。するとその襖側(ふすまぎわ)のうす暗がりには、私の全く見知らない四十恰好(しじゅうがっこう)の男が一人、端然として坐っていた。実を云えばその瞬間、私は驚愕(きょうがく)――と云うよりもむしろ迷信的な恐怖に近い一種の感情に脅(おびや)かされた。また実際その男は、それだけのショックに価すべく、ぼんやりしたランプの光を浴びて、妙に幽霊じみた姿を具えていた。が、彼は私と顔を合わすと、昔風に両肱(りょうひじ)を高

く張って恭（うやうや）しく頭（かしら）を下げながら、思ったよりも若い声で、ほとんど機械的にこんな挨拶の言（ことば）を述べた。
「夜中（やちゅう）、殊に御忙しい所を御邪魔に上りまして、何とも申し訳の致しようはございませんが、ちと折入って先生に御願い申したい儀がございまして、失礼をも顧ず、参上致したような次第でございます。」
　ようやく最初のショックから恢復した私は、その男がこう弁じ立てている間に、始めて落着いて相手を観察した。彼は額の広い、頰（ほお）のこけた、年にも似合わず眼に働きのある、品の好（い）い半白（はんぱく）の人物だった。それが紋附でこそなかったが、見苦しからぬ羽織袴で、しか

も膝のあたりにはちゃんと扇面を控えていた。ただ、咄嗟（とっさ）の際にも私の神経を刺戟したのは、彼の左の手の指が一本欠けている事だった。私はふとそれに気がつくと、我知らず眼をその手から外（そ）らさないではいられなかった。

「何か御用ですか。」

私は読みかけた書物を閉じながら、無愛想にこう問いかけた。云うまでもなく私には、彼の唐突な訪問が意外であると共に腹立しかった。と同時にまた別荘番が一言（いちごん）もこの客来（きゃくらい）を取次がないのも不審だった。しかしその男は私の冷淡な言葉にもめげないで、もう一

度額を畳につけると、相不変(あいかわらず)朗読でもしそうな調子で、
「申し遅れましたが、私(わたくし)は中村玄道(なかむらげんどう)と申しますもので、やはり毎日先生の御講演を伺いに出て居りますが、勿論多数の中でございますから、御見覚えもございますまい。どうかこれを御縁にして、今後はまた何分ともよろしく御指導のほどを御願い致します。」
私はここに至って、ようやくこの男の来意が呑みこめたような心もちがした。が、夜中(やちゅう)書見の清興(せいきょう)を破られた事は、依然として不快に違いなかった。
「すると——何か私の講演に質疑でもあると仰有(おっしゃ)るのですか。」

こう尋ねた私は内心ひそかに、「質疑なら明日（みょうにち）講演場で伺いましょう。」と云う体（てい）の善い撃退の文句を用意していた。しかし相手はやはり顔の筋肉一つ動かさないで、じっと袴の膝の上に視線を落しながら、

「いいえ、質疑ではございません。ございませんが、実は私一身のふり方につきまして、善悪とも先生の御意見を承りたいのでございます。と申しますのは、唯今からざっと二十年ばかり以前、私はある思いもよらない出来事に出合いまして、その結果とんと私にも私自身がわからなくなってしまいました。つきましては、先生のような倫理学界の大家の御説を伺いましたら、

自然分別もっこうと存じまして、今晩はわざわざ推参致したのでございます。いかがでございましょう。御退屈でも私の身の上話を一通り御聴き取り下さる訳には参りますまいか。」

私は答に躊躇した。成程専門の上から云えば倫理学者には相違ないが、そうかと云ってまた私は、その専門の知識を運転させてすぐに当面の実際問題への霊活な解決を与え得るほど、融通の利く頭脳の持ち主だとは遺憾ながら己惚れる事が出来なかった。すると彼は私の逡巡に早くも気がついたと見えて、今まで袴の膝の上に伏せていた視線をあげると、半ば歎願

するように、怯(お)ず怯(お)ず私の顔色(かおいろ)を窺いながら、前よりやや自然な声で、慇懃(いんぎん)にこう言葉を継(つ)いだ。

「いえ、それも勿論強いて先生から、是非の御判断を伺わなくてはならないと申す訳ではございません。ただ、私がこの年になりますまで、始終頭を悩まさずにはいられなかった問題でございますから、せめてその間の苦しみだけでも先生のような方の御耳に入れて、多少にもせよ私自身の心やりに致したいと思うのでございます。」

　こう云われて見ると私は、義理にもこの見知らない男の話を聞かないと云う訳には行かなかった。が、同

時にまた不吉な予感と茫漠とした一種の責任感とが、重苦しく私の心の上にのしかかって来るような心もちもした。私はそれらの不安な感じを払い除けたい一心から、わざと気軽らしい態度を装（よそお）って、うすぼんやりしたランプの向うに近々と相手を招じながら、

「ではとにかく御話だけ伺いましょう。もっともそれを伺ったからと云って、格別御参考になるような意見などは申し上げられるかどうかわかりませんが。」

「いえ、ただ、御聞きになってさえ下されば、それでもう私には本望すぎるくらいでございます。」

中村玄道（なかむらげんどう）と名のった人物は、指の一本足りない手に

畳の上の扇子をとり上げると、時々そっと眼をあげて私よりもむしろ床の間の楊柳観音（ようりゅうかんのん）を偸（ぬす）み見ながら、やはり抑揚（よくよう）に乏しい陰気な調子で、とぎれ勝ちにこう話し始めた。

ちょうど明治二十四年の事でございます。御承知の通り二十四年と申しますと、あの濃尾（のうび）の大地震（おおじしん）がございました年で、あれ以来この大垣（おおがき）もがらりと容子（ようす）が

違ってしまいましたが、その頃町には小学校がちょうど二つございまして、一つは藩侯の御建てになったもの、一つは町方（まちかた）の建てたものと、こう分れて居ったものでございます。私はその藩侯の御建てになったK小学校へ奉職して居りましたが、二三年前（まえ）に県の師範学校を首席で卒業致しましたのと、その後（のち）また引き続いて校長などの信用も相当にございましたので、年輩にしては高級な十五円と云う月俸を頂戴致して居りました。唯今でこそ十五円の月給取は露命も繋（つな）げないぐらいでございましょうが、何分二十年も以前の事で、十分とは参りませんまでも、暮しに不自由はございま

せんでしたから、同僚の中でも私などは、どちらかと申すと羨望(せんぼう)の的になったほどでございました。

家族は天にも地にも妻一人で、それもまだ結婚してから、ようやく二年ばかりしか経たない頃でございました。妻は校長の遠縁のもので、幼い時に両親に別れてから私の所へ片づくまで、ずっと校長夫婦が娘のように面倒を見てくれた女でございます。名は小夜(さよ)と申しまして、私の口から申し上げますのも、異なものでございますが、至って素直な、はにかみ易い――その代りまた無口過ぎて、どこか影の薄いような、寂しい生れつきでございました。が、私には似たもの夫婦で、

たといこれと申すほどの花々しい楽しさはございませんでも、まず安らかなその日その日を、送る事が出来たのでございます。

　するとあの大地震(おおじしん)で、——忘れも致しません十月の二十八日、かれこれ午前七時頃でございましょうか。私が井戸端(ばた)で楊枝(ようじ)を使っていると、妻は台所で釜の飯を移している。——その上へ家がつぶれました。それがほんの一二分の間の事で、まるで大風のような凄(すさ)まじい地鳴りが襲いかかったと思いますと、たちまちめきめきと家が傾(かし)いで、後(あと)はただ瓦の飛ぶのが見えたばかりでございます。私はあっと云う暇(ひま)もなく、やにわ

に落ちて来た庇（ひさし）に敷かれて、しばらくは無我無中のまま、どこからともなく寄せて来る大震動の波に揺られて居りましたが、やっとその庇の下から土煙の中へ這い出して見ますと、目の前にあるのは私の家の屋根で、しかも瓦の間に草の生えたのが、そっくり地の上へひしゃげて居りました。

　その時の私の心もちは、驚いたと申しましょうか。慌（あわ）てたと申しましょうか。まるで放心したのも同前で、べったりそこへ腰を抜いたなり、ちょうど嵐の海のように右にも左にも屋根を落した家々の上へ眼をやって、地鳴りの音、梁（はり）の落ちる音、樹木の折れる音、壁の崩

れる音、それから幾千人もの人々が逃げ惑うのでございましょう、声とも音ともつかない響が騒然と煮えくり返るのをぼんやり聞いて居りました。が、それはほんの刹那(せつな)の間(あいだ)で、やがて向うの庇(ひさし)の下に動いているものを見つけますと、私は急に飛び上って、凶(わる)い夢からでも覚めたように意味のない大声を挙げながら、いきなりそこへ駈けつけました。庇の下には妻の小夜(さよ)が、下(か)半身を梁に圧(お)されながら、悶え苦しんで居ったのでございます。

　私は妻の手を執って引張りました。妻の肩を押して起そうとしました。が、圧(お)しにかかった梁は、虫の這

い出すほども動きません。私はうろたえながら、庇の板を一枚一枚むしり取りました。取りながら、何度も妻に向って「しっかりしろ。」と喚(わめ)きました。妻を？いやあるいは私自身を励ましていたのかも存じません。小夜は「苦しい。」と申しました。「どうかして下さいまし。」とも申しました。が、私に励まされるまでもなく、別人のように血相を変えて、必死に梁を擡(もた)げようと致して居りましたから、私はその時妻の両手が、爪も見えないほど血にまみれて、震えながら梁をさぐって居ったのが、今でもまざまざと苦しい記憶に残っているのでございます。

それが長い長い間の事でございました。——その内にふと気がつきますと、どこからか濛々とした黒煙（くろけむり）が一なだれに屋根を渡って、むっと私の顔へ吹きつけました。と思うと、その煙の向うにけたたましく何か爆（は）ぜる音がして、金粉（きんぷん）のような火粉（ひのこ）がばらばらと疎（まば）らに空へ舞い上りました。私は気の違ったように妻へ獅噛（しが）みつきました。そうしてもう一度無二無三（むにむさん）に、妻の体を梁の下から引きずり出そうと致しました。が、やはり妻の下半身は一寸（いっすん）も動かす事は出来ません。私はまた吹きつけて来る煙を浴びて、庇に片膝つきながら、噛みつくように妻へ申しました。何を？　と御尋

ねになるかも存じません、いや、必ず御尋ねになりましょう。しかし私も何を申したか、とんと覚えていないのでございます。ただ私はその時妻が、血にまみれた手で私の腕をつかみながら、「あなた。」と一言（ひとこと）申したのを覚えて居ります。私は妻の顔を見つめました。あらゆる表情を失った、眼ばかり徒（いたずら）に大きく見開いている、気味の悪い顔でございます。すると今度は煙ばかりか、火の粉を煽った一陣の火気が、眼も眩（くら）むほど私を襲って来ました。私はもう駄目だと思いました。妻は生きながら火に焼かれて、死ぬのだと思いました。生きながら？　私は血だらけな妻の手を握ったまま、

また何か喚(わめ)きました。と、妻もまた繰返して、「あなた。」と一言申しました。私はその時その「あなた。」と云う言葉の中に、無数の意味、無数の感情を感じたのでございます。生きながら？　生きながら？　私は三度何か叫びました。それは「死ね。」と云ったようにも覚えて居ります。「己(おれ)も死ぬ。」と云ったようにも覚えて居ります。が、何と云ったかわからない内に、私は手当(てあた)り次第、落ちている瓦を取り上げて、続けさまに妻の頭へ打ち下しました。

それから後(のち)の事は、先生の御察しにまかせるほかはございません。私は独り生き残りました。ほとんど町

中を焼きつくした火と煙とに追われながら、小山のように路を塞（ふさ）いだ家々の屋根の間をくぐって、ようやく危い一命を拾ったのでございます。幸か、それともまた不幸か、私には何にもわかりませんでした。ただその夜、まだ燃えている火事の光を暗い空に望みながら、同僚の一人二人と一しょに、やはり一ひしぎにつぶされた学校の外の仮小屋で、炊き出しの握り飯を手にとった時とめどなく涙が流れた事は、未だにどうしても忘れられません。

中村玄道（なかむらげんどう）はしばらく言葉を切って、臆病（おくびょう）らしい眼を畳（たたみ）へ落した。突然こんな話を聞かされた私も、いよいよ広い座敷の春寒（はるさむ）が襟元まで押寄せたような心もちがして、「成程（なるほど）」と云う元気さえ起らなかった。

部屋の中には、ただ、ランプの油を吸い上げる音がした。それから机の上に載せた私の懐中時計が、細かく時を刻む音がした。と思うとまたその中で、床の間の楊柳観音（ようりゅうかんのん）が身動きをしたかと思うほど、かすかな吐息（といき）をつく音がした。

私は悸(おび)えた眼を挙げて、悄然と坐っている相手の姿を見守った。吐息をしたのは彼だろうか。それとも私自身だろうか。——が、その疑問が解けない内に、中村玄道はやはり低い声で、徐(おもむろ)に話を続け出した。

申すまでもなく私は、妻の最期を悲しみました。そればかりか、時としては、校長始め同僚から、親切な同情の言葉を受けて、人前も恥じず涙さえ流した事が

ございました。が、私があの地震の中で、妻を殺したと云う事だけは、妙に口へ出して云う事が出来なかったのでございます。

「生きながら火に焼かれるよりはと思って、私が手にかけて殺して来ました。」——これだけの事を口外したからと云って、何も私が監獄へ送られる次第でもございますまい。いや、むしろそのために世間は一層私に同情してくれたのに相違ございません。それがどう云うものか、云おうとするとたちまち喉元にこびりついて、一言も舌が動かなくなってしまうのでございます。

当時の私はその原因が、全く私の臆病に根ざしているのだと思いました。が、実は単に臆病と云うよりも、もっと深い所に潜んでいる原因があったのでございます。しかしその原因は、私に再婚の話が起って、いよいよもう一度新生涯へはいろうと云う間際までは、私自身にもわかりませんでした。そうしてそれがわかった時、私はもう二度と人並の生活を送る資格のない、憐むべき精神上の敗残者になるよりほかはなかったのでございます。

再婚の話を私に持ち出したのは、小夜（さよ）の親許（おやもと）になっていた校長で、これが純粋に私のためを計った結果だ

と申す事は私にもよく呑み込めました。また実際その頃はもうあの大地震（おおじしん）があってから、かれこれ一年あまり経った時分で、校長がこの問題を切り出した以前にも、内々同じような相談を持ちかけて私の口裏（くちうら）を引いて見るものが一度ならずあったのでございます。所が校長の話を聞いて見ますと、意外な事にはその縁談の相手と云うのが、唯今先生のいらっしゃる、このＮ家の二番娘で、当時私が学校以外にも、時々出稽古（でげいこ）の面倒を見てやった尋常四年生の長男の姉だったろうではございませんか。勿論私は一応辞退しました。第一教員の私と資産家のＮ家とでは格段に身分も違いますし、

家庭教師と云う関係上、結婚までには何か曰（いわ）くがあったろうなどと、痛くない腹を探（さぐ）られるのも面白くないと思ったからでございます。同時にまた私の進まなかった理由の後（うしろ）には、去る者は日に疎（うと）しで、以前ほど悲しい記憶はなかったまでも、私自身打ち殺した小夜（さよ）の面影が、箒星（ほうきぼし）の尾のようにぼんやり纏（まつ）わっていたのに相違ございません。

が、校長は十分私の心もちを汲んでくれた上で、私くらいの年輩の者が今後独身生活を続けるのは困難だと云う事、しかも今度の縁談は先方から達（た）っての所望（しょもう）だと云う事、校長自身が進んで媒酌（ばいしゃく）の労を執（と）る以上、

悪評などが立つ謂われのないと云う事、そのほか日頃私の希望している東京遊学のごときも、結婚した暁には大いに便宜があるだろうと云う事――そう事をいろいろ並べ立てて、根気よく私を説きました。こう云われて見ますと、私も無下には断ってしまう訳には参りません。そこへ相手の娘と申しますのは、評判の美人でございましたし、その上御恥しい次第ではございますが、N家の資産にも目がくれましたので、校長に勧められるのも度重なって参りますと、いつか「熟考して見ましょう。」が「いずれ年でも変りましたら。」などと、だんだん軟化致し始めました。そうしてその年

の変った明治二十六年の初夏には、いよいよ秋になったら式を挙げると云う運びさえついてしまったのでございます。

するとその話がきまった頃から、妙に私は気が鬱(うつ)して、自分ながら不思議に思うほど、何をするにも昔のような元気がなくなってしまいました。たとえば学校へ参りましても、教員室の机に倚(よ)り懸(かか)りながら、ぼんやり何かに思い耽って、授業の開始を知らせる板木(ばんぎ)の音さえ、聞き落してしまうような事が度々あるのでございます。その癖何が気になるのかと申しますと、それは私にもはっきりとは見極めをつける事が出来ませ

ん。ただ、頭の中の歯車がどこかしっくり合わないような――しかもそのしっくり合わない向うには、私の自覚を超越した秘密が蟠(わだかま)っているような、気味の悪い心もちがするのでございます。

それがざっと二月(ふたつき)ばかり続いてからの事でございましたろう。ちょうど暑中休暇になった当座で、ある夕方私が散歩かたがた、本願寺別院(ほんがんじべついん)の裏手にある本屋の店先を覗いて見ますと、その頃評判の高かった風俗画報と申す雑誌が五六冊、夜窓鬼談(やそうきだん)や月耕漫画(げっこうまんが)などと一しょに、石版刷の表紙を並べて居りました。そこで店先に佇(たたず)みながら、何気なくその風俗画報を一冊手に

とって見ますと、表紙に家が倒れたり火事が始ったりしている画があって、そこへ二行に「明治廿四年十一月三十日発行、十月廿八日震災記聞」と大きく刷ってあるのでございます。それを見た時、私は急に胸がはずみ出しました。私の耳もとでは誰かが嬉しそうに嘲笑(あざわら)いながら、「それだ。それだ。」と囁くような心もちさえ致します。私はまだ火をともさない店先の薄明りで、慌(あわただ)しく表紙をはぐって見ました。するとまっ先に一家の老若(ろうにゃく)が、落ちて来た梁(はり)に打ちひしがれて惨死(ざんし)を遂げる画が出て居ります。それから土地が二つに裂けて、足を過った女子供を呑んでいる画が出て居

ります。それから——一々数え立てるまでもございませんが、その時その風俗画報は、二年以前の大地震の光景を再び私の眼の前へ展開してくれたのでございます。長良川鉄橋陥落の図、尾張紡績会社破壊の図、第三師団兵士屍体発掘の図、愛知病院負傷者救護の図——そう云う凄惨な画は次から次と、あの呪わしい当時の記憶の中へ私を引きこんで参りました。私は眼がうるみました。体も震え始めました。苦痛とも歓喜ともつかない感情は、用捨なく私の精神を蕩漾させてしまいます。そうして最後の一枚の画が私の眼の前に開かれた時——私は今でもその時の驚愕がありあり心に

残って居ります。それは落ちて来た梁（はり）に腰を打たれて、一人の女が無惨（むざん）にも悶え苦しんでいる画でございました。その梁の横（よこた）わった向うには、黒煙（くろけむり）が濛々と巻き上って、朱（しゅ）を撥（はじ）いた火の粉さえ乱れ飛んでいるではございませんか。これが私の妻でなくて誰でしょう。妻の最期でなくて何でしょう。私は危く風俗画報を手から落そうと致しました。危く声を挙げて叫ぼうと致しました。しかもその途端に一層私を悸（おび）えさせたのは、突然あたりが赤々と明（あか）くなって、火事を想わせるような煙の匂（におい）がぷんと鼻を打った事でございます。私は強いて心を押し鎮めながら、風俗画報を下へ置いて、

きょろきょろ店先を見廻しました。店先ではちょうど小僧が吊（つり）ランプへ火をとぼして、夕暗の流れている往来へ、まだ煙の立つ燐寸殻（マッチがら）を捨てている所だったのでございます。

それ以来、私は、前よりもさらに幽鬱な人間になってしまいました。今まで私を脅（おびやか）したのはただ何とも知れない不安な心もちでございましたが、その後はある疑惑（ぎわく）が私の頭の中に蟠（わだかま）って、日夜を問わず私を責め虐（さいな）むのでございます。と申しますのは、あの大地震（おおじしん）の時私が妻を殺したのは、果して已（や）むを得なかったのだろうか。――もう一層露骨に申しますと、

私は妻を殺したのは、始から殺したい心があって殺したのではなかったろうか。大地震はただ私のために機会を与えたのではなかったろうか、——こう云う疑惑でございました。私は勿論この疑惑の前に、何度思い切って「否、否。」と答えた事だかわかりません。が、本屋の店先で私の耳に「それだ。それだ。」と囁いた何物かは、その度にまた嘲笑って、「では何故お前は妻を殺した事を口外する事が出来なかったのだ。」と、問い詰るのでございます。私はその事実に思い当ると、必ずぎくりと致しました。ああ、何故私は妻を殺したなら殺したと云い放てなかったのでございましょう。何

故今日までひた隠しに、それほどの恐しい経験を隠して居ったのでございましょう。
しかもその際私の記憶へ鮮に生き返って来たものは、当時の私が妻の小夜を内心憎んでいたと云う、忌わしい事実でございます。これは恥を御話しなければ、ちと御会得が参らないかも存じませんが、妻は不幸にも肉体的に欠陥のある女でございました。（以下八十二行省略）………そこで私はその時までは、覚束ないながら私の道徳感情がともかくも勝利を博したものと信じて居ったのでございます。が、あの大地震のような凶変が起って、一切の社会的束縛が地上から姿を

隠した時、どうしてそれと共に私の道徳感情も亀裂（きれつ）を生じなかったと申せましょう。どうして私の利己心も火の手を揚げなかったと申せましょう。私はここに立ち至ってやはり妻を殺したのは、殺すために殺したのではなかったろうかと云う、疑惑を認めずには居られませんでした。私がいよいよ幽鬱になったのは、むしろ自然の数（すう）とでも申すべきものだったのでございます。

しかしまだ私には、「あの場合妻を殺さなかったにしても、妻は必ず火事のために焼け死んだのに相違ない。そうすれば何も妻を殺したのが、特に自分の罪悪だとは云われない筈だ。」と云う一条の血路がござい

ました。所がある日、もう季節が真夏から残暑へ振り変って、学校が始まって居た頃でございますが、私ども教員が一同教員室の卓子(テエブル)を囲んで、番茶を飲みながら、他瞹(たわい)もない雑談を交して居りますと、どう云う時の拍子だったか、話題がまたあの二年以前の大地震に落ちた事がございます。私はその時も独り口を噤(つぐ)んだぎりで、同僚(どうりょう)の話を聞くともなく聞き流して居りましたが、本願寺の別院の屋根が落ちた話、船町(ふなまち)の堤防が崩れた話、俵町(たわらまち)の往来の土が裂けた話――とそれからそれへ話がはずみましたが、やがて一人の教員が申しますには、中町(なかまち)とかの備後屋(びんごや)と云う酒屋の女房は、

一旦梁の下敷になって、身動きも碌に出来なかったのが、その内に火事が始って、梁も幸焼け折れたものだから、やっと命だけは拾ったと、こう云うのでございます。私はそれを聞いた時に、俄に目の前が暗くなって、そのまましばらくは呼吸さえも止るような心地が致しました。また実際その間は、失心したも同様な姿だったのでございましょう。ようやく我に返って見ますと、同僚は急に私の顔色が変って、椅子ごと倒れそうになったのに驚きながら、皆私のまわりへ集って、水を飲ませるやら薬をくれるやら、大騒ぎを致して居りました。が、私はその同僚に礼を云う余裕もな

いほど、頭の中はあの恐しい疑惑の塊（かたまり）で一ぱいになっていたのでございます。私はやはり妻を殺すために殺したのではなかったろうか。たとい梁（はり）に圧（お）されていても、万一命が助かるのを恐れて、打ち殺したのではなかったろうか。もしあのまま殺さないで置いたなら今の備後屋（びんごや）の女房の話のように、私の妻もどんな機会で九死（きゅうし）に一生（いっしょう）を得たかも知れない。それを私は情無（なさけな）く、瓦の一撃で殺してしまった――そう思った時の私の苦しさは、ひとえに先生の御推察を仰ぐほかはございません。私はその苦しみの中で、せめてはＮ家との縁談を断ってでも、幾分一身を潔（きよ）くしようと決心

したのでございます。
　ところがいよいよその運びをつけると云う段になりますと、折角の私の決心は未練にもまた鈍り出しました。何しろ近々結婚式を挙げようと云う間際になって、突然破談にしたいと申すのでございますから、あの大地震の時に私が妻を殺害(せつがい)した顛末(てんまつ)は元より、これまでの私の苦しい心中も一切打ち明けなければなりますまい。それが小心な私には、いざと云う場合に立ち至ると、いかに自(みずか)ら鞭撻しても、断行する勇気が出なかったのでございます。私は何度となく腑甲斐(ふがい)ない私自身を責めました。が、徒(いたずら)に責めるばかりで、何一つ然

るべき処置も取らない内に、残暑はまた朝寒に移り変って、とうとう所謂華燭の典を挙げる日も、目前に迫ったではございませんか。

　私はもうその頃には、だれとも滅多に口を利かないほど、沈み切った人間になって居りました。結婚を延期したらと注意した同僚も、一人や二人ではございません。医者に見て貰ったらと云う忠告も、三度まで校長から受けました。が、当時の私にはそう云う親切な言葉の手前、外見だけでも健康を顧慮しようと云う気力さえすでになかったのでございます。と同時にまたその連中の心配を利用して、病気を口実に結婚を延期

するのも、今となっては意気地(いくじ)のない姑息手段(こそくしゅだん)としか思われませんでした。しかも一方ではＮ家の主人などが、私の気鬱(きうつ)の原因を独身生活の影響だとでも感違いをしたのでございましょう。一日も早く結婚しろと頻(しき)りに主張しますので、日こそ違いますが二年前(ぜん)にあの大地震のあった十月、いよいよ私はＮ家の本邸で結婚式を挙げる事になりました。連日の心労に憔悴(しょうすい)し切った私が、花婿(はなむこ)らしい紋服を着用して、いかめしく金屛風を立てめぐらした広間へ案内された時、どれほど私は今日(こんにち)の私を恥しく思ったでございましょう。私はまるで人目を偸(ぬす)んで、大罪悪を働こうとしている悪

漢のような気が致しました。いや、ような気ではございません。実際私は殺人の罪悪をぬり隠して、Ｎ家の娘と資産とを一時盗もうと企てている人非人（にんぴにん）なのでございます。私は顔が熱くなって参りました。胸が苦しくなって参りました。出来るならこの場で、私が妻を殺した一条を逐一（ちくいち）白状してしまいたい。――そんな気がまるで嵐のように、烈しく私の頭の中を駈けめぐり始めました。するとその時、私の着座している前の畳へ、夢のように白羽二重（しろはぶたえ）の足袋が現れました。続いて仄（ほの）かな波の空に松と鶴とが霞んでいる裾模様が見えました。それから錦襴（きんらん）の帯、はこせこの銀鎖、白襟と順

を追って、鼈甲の櫛笄が重そうに光っている高島田が眼にはいった時、私はほとんど息がつまるほど、絶対絶命［＃「絶対絶命」はママ］な恐怖に圧倒されて、思わず両手を畳へつくと、『私は人殺しです。極重悪の罪人です』と、必死な声を挙げてしまいました。……
……

中村玄道はこう語り終ると、しばらくじっと私の顔

を見つめていたが、やがて口もとに無理な微笑を浮べながら、

「その以後の事は申し上げるまでもございますまい。が、ただ一つ御耳に入れて置きたいのは、当日限り私は狂人と云う名前を負わされて、憐むべき余生(よせい)を送らなければならなくなった事でございます。果して私が狂人かどうか、そのような事は一切先生の御判断に御任(おま)かせ致しましょう。しかしたとい狂人でございましても、私を狂人に致したものは、やはり我々人間の心の底に潜んでいる怪物のせいではございますまいか。その怪物が居ります限り、今日(きょう)私を狂人と嘲笑(あざわら)ってい

る連中でさえ、明日(あす)はまた私と同様な狂人にならないものでもございません。――とまあ私は考えて居(お)るのでございますが、いかがなものでございましょう。」

ランプは相不変(あいかわらず)私とこの無気味(ぶきみ)な客との間に、春寒い焔を動かしていた。私は楊柳観音(ようりゅうかんのん)を後(うしろ)にしたまま、相手の指の一本ないのさえ問い質(ただ)して見る気力もなく、黙然(もくねん)と坐っているよりほかはなかった。

（大正八年六月）

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年12月１日第１刷発行
１９９６（平成８）年４月１日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月８日公開
２００４年３月７日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。